

《研究ノート》

大谷禎之介氏の『資本論』第三部第五章（篇）

草稿の研究によせて¹

竹 永 進

- 一. はじめに
- 二. 『資本論』諸草稿の執筆と編集・刊行 ——第一次メガまで——
- 三. 第二次メガ、日本の草稿研究、メガ編集への貢献
- 四. 『資本論』第三部第五章（篇）の草稿の研究
- 五. 質問ないし要望

一. はじめに

本日の大谷禎之介さんのご報告は、大谷さんが今から20年以上も前の前世紀80年代初頭にアムステルダムの社会史国際研究所でおこなった草稿研究の成果をもとに、一昨年までかかって連続的に発表されてきた膨大なお仕事の結果を、われわれ非専門家にもわかりやすい形で示されたものです。長年にわたる氏のお仕事のひとつの節目にあたる時点で行われた今日のお話はまことに時宜を得たものであると思います。

ただいまのお話は、マルクスの主著『資本論』第三部第五章の草稿の解説から見えるこの部分におけるマルクスのもともとの議論の内容・性格の提示と、これまで一世紀にわたって第三部の定本として広く読まれまた研究と論争の対象となってきたエンゲルス編集版の問題点の指摘という、一般にマルクスないしマルクス経済学に関心をもつ人々にとってもやや専門的な領域にかかわるものでした。ご出席者のなかには、マルクスによる

¹ 本稿は2004年11月20日に明治大学で開催された現代史研究会での大谷禎之介氏の報告「マルクスの利子生み資本論——資本論第三部草稿によって」に対する筆者のコメントの原稿に、独立の文章としても読めるよう若干の手入れをしたものである。大谷氏の当日の報告と同趣旨の論文は、法政大学経済学部紀要『経済志林』の同氏の退職記念号（第72巻4号、2005年3月）に掲載されている。

『資本論』関係の草稿の執筆やマルクス死後におけるその編集・刊行といった、いわゆるマルクス文献学的な事柄に必ずしも親しんでいらっしゃる方々もおいでのこととされます。

私はコメンテーターを仰せつかりましたが、私自身も本日の報告で扱われているテーマそのものについて専門的に研究してきたわけではありません。大学院で在籍していましたゼミナール（佐藤金三郎ゼミ）で『資本論』の文献的な研究の手ほどきを少しばかり受けたことがあるというにすぎません。そこで、私の以下のコメントは大谷さんのお話の細かい論点について感想を述べたり質問をしたりというよりも、むしろ、まず本日のご報告では直接ふれられなかった背景的な事柄についてお話をさせていただき、最後に大谷さんのお仕事について私がポイントと考える点を述べ、若干のあまり専門的でない質問を出させていただいて責めを塞いだことにさせていただきたいと思います。

二. 『資本論』諸草稿の執筆と編集・刊行 —— 第一次メガまで ——

本日大谷さんが中心的に取り上げられたのは、マルクスが利子生み資本について論じた『資本論』第三部第五章の草稿でした。当然ながらこの第五章は前後の諸章を合わせて7つの章からなる『資本論』第三部の草稿全体の（もっとも大きい）一部です。現在われわれが書店で入手し得る『資本論』は3つの部（ないし巻）からなっていますが、『資本論』がこうした現行の形になるまでには複雑な経緯がありました。ここではあまり細部に立ち入ることはしませんが、簡単にその経緯を振り返っておきます。マルクスが経済学の批判と資本主義経済そのものの批判をめざす体系的な著作を射程に入れてその準備の研究をはじめたのは、1848年のヨーロッパの諸国の革命運動の敗退後ロンドンに亡命してからの50年代の前半でした。そして48年から約10年後に再び勃発した恐慌と革命運動の再興の展望に促されるように、57-58年に「経済学批判」の体系のための最初の草稿を書きます。これが1970年代頃に盛んに研究された『経済学批判要綱』です。昨年翻訳の出たネグリの『マルクスを超えるマルクス』もこの時代に書かれた独特な視角からの『要綱』研究です。そして、この草稿（第一次草稿とよばれます）の最初の部分をもとに著書として仕上げられ1859年に刊行されたのが『経済学批判——第一分冊』です。この本は商品と貨幣の分析を

含むだけで一見すると資本主義批判らしきものはなにも含まれていません。しかしここでの商品と貨幣の分析はそれに続くマルクスの資本主義批判の中核的な部分である剰余価値論の基礎となるものでした。マルクスは第一分冊に続いてすぐにこの剰余価値論を含む第二分冊を出版するつもりでしたが、病気や経済的困窮そして40年代末以来の政治的な闘争に災いされ、また、もっと根本的には再度の理論的な研究の深化のために、第二分冊の原稿の執筆のつもりではじめた仕事が、途中から剰余価値の理論にかんする学説史的な検討や剰余価値の転化形態である利潤その他についての論述に変わってしまい、当初の出版計画の遅延と変更を余儀なくされました。こうして書かれたのが（『剰余価値学説史』を含む）1861-63年に執筆と推定される「経済学批判」の第二次草稿である23冊のノートです。マルクスはこのノートの執筆途上で、「第一次草稿」の各所に書き留めていた6つの部分（資本、賃労働、土地所有、国家、外国貿易、世界市場）からなる体系のプランのうちの最初の項目である資本のそのまた第一部分をなす「資本一般」を3つの部に分けて展開する構想を固めたと推定されています。63年の7月頃にこの23冊のノート（このノートは大雑把に言えば、すでに59年に刊行されていた『経済学批判——第一分冊』の部分を除いて現行の『資本論』全3部と『剰余価値学説史』に相当する内容を含むものでした）を書き終えてから、このノートの素材をもとにマルクスは63年後半から65年いっばいの2年半たらずのあいだに『資本論』の3つの部の下書きを書き、その上で66年初めから『資本論』第一部の印刷用原稿の仕上げの作業にかかり、翌67年に第一部を刊行しました。

このような作業過程のなかで第三部の最初の原稿は65年に書かれたものと推定されています。67年の第一部刊行後マルクスは最晩年に至るまで『資本論』の仕上げの作業を最後まで続けましたが、彼がこの過程で従事したのは既刊第一部の何度かにわたる改訂作業と、第一部にすぐ続く第二部の仕上げでした。今日はこれらの部分についてふれる時間がありませんが、こうした事情のため第三部の仕上げは後回しにされたようで、実際、65年に書かれた最初の原稿以後、マルクスの書き残した資本論関係の草稿のなかには第三部関係のものはごくわずかな断片的記述以外にはなにもありませんでした。そこで、この60年代中葉の第三部原稿は今日「第一稿」とか「主要原稿」とか呼ばれています。大谷さんの本日のお話は、この主要原稿の中の最大の部分である第五章の内容と、これを編集刊行したエンゲルス版（1894年刊）のはらむ問題の検討をテーマとするものでした。

本日は『資本論』関係のものだけに限定しますが、以上に述べたところからもすぐに伺えるように、マルクスが計画し執筆したもののうち生前に刊行しえたものは『資本論』第一部各版だけでした。そして、他の多くのものは草稿のまま残され、この編集と刊行はエンゲルスを始めとする後世の仕事とされました。さらに話を第三部だけに限定しますと、エンゲルスがマルクス没後『資本論』第二部の編集と刊行を1885年にやり遂げ、その後9年間という比較にならないほどの長い年月を費やした編集作業の末にようやく、彼自身がこの世を去ることになる前年の1894年に第三部はおおやけにされました。周知のように、ベームによる「価値の生産価格への転形」の問題提起をはじめ、この第三部は刊行とともにたちまちマルクスの経済学体系にかかわる多くの論争の引き金になりました。その後も20世紀を通じて、『資本論』第三部は第二部とともに、直接マルクスの手によって刊行されたものではないにもかかわらず、マルクスの経済理論の原典として第一部と並ぶ信憑性を付与されてきました。30年代のソ連におけるスターリン体制の確立、そしてソ連邦共産党の国際共産主義運動における圧倒的な影響力のもとで、エンゲルス版が長い間このような扱いを受け、その編集の実態にたいして疑いをさしはさんだり問題を指摘することさえタブーとされる時代が続きました。

しかし、エンゲルスの死後マルクスの遺稿を受け継いだカウツキーをはじめとするドイツ社会民主党の理論的指導者たちや、20年代ソ連でマルクスの文献的遺産の研究に従事したリャザノフらは、当然のことながら『資本論』関係を含むマルクスの膨大な文献的遺産の存在を承知しており、これらの収集・研究に従事し、これらをオリジナルに忠実な形でおおやけにしようとしていました。マルクス・エンゲルス没後のかなり長期にわたるこうした努力が大規模に成果を上げようとしたのが、20年代末からリャザノフの指導の下に開始され、スターリンによる粛清と第二次大戦のために30年代に頓挫した第一次『マルクス・エンゲルス全集（MEGA）』の企画でした。第一次メガは途中で挫折したとはいえ、いくつかの巻が実際に刊行されそのなかには初めておおやけにされるものも多く含まれていました。しかし、こと『資本論』関係のものということになりますと、第一次メガに関連して刊行された大きな未刊行資料は1939年と1941年に2巻にわけて出された『経済学批判要綱』だけでした。その他の『資本論』関係の大きな草稿、すなわち、先に言及しました「経済学批判」の第二次草稿（61-63年執筆とされる23冊のノート）、その直後に65年末までか

かって書かれないわば「第三次草稿」、そして、マルクスが晩年まで第八次草稿まで書いた第二部関連の諸原稿、これらについてはまったく手つかずのままでした。また、『経済学批判要綱』も当時としてはきわめて厳密な編集によって原語で刊行されたとはいえ、第二次大戦中であったことも災いして、ごく一部の専門家を除いてほとんど注目されることのないままの状態におかれました。大戦後の1953年に39・41年版の復刻が刊行されると、日本では故佐藤金三郎がこの資料を駆使してプラン問題についての斬新な問題提起を行ったり、50年代末からは分冊形式で（今からみるときわめて問題の多い）日本語訳が刊行されたりという動きはありました。

三．第二次メガ、日本の草稿研究、メガ編集への貢献

しかし、この時代まではまだ当時のソ連邦共産党中央委員会直属の研究機関（数次にわたって名称を変更しましたが、『マルクス＝レーニン主義研究所』という名称が一番長い間、十数年前の社会主義崩壊の時点まで用いられていました）の手によって編集されたいわば「官許版」『資本論』全3部（ロシア語版を「オリジナル」とする『マルクス・エンゲルス著作集（MEW）』の一部として収録される）が、マルクスの経済理論の神聖不可侵で不動の原典として学問の世界でも大方受け入れられていました。こうした状況がまだ続いていた中で、特定の政治的・イデオロギー的権威によって押しつけられたのではないマルクスのオリジナルに依拠しようとする動きが他方では徐々に現れてきました。こうした動きは、大きくはスターリン死後のフルシチョフによるスターリン批判そして中ソ論争に象徴される国際共産主義運動・マルクス主義の「一枚岩の団結」の崩壊と多極化、同じくマルクス主義を鼓吹しながら相互に対立しあうさまざまな思想や運動の潮流の出現により、また、やや小さい状況としては70年代にはじまる第二次メガ刊行計画の始動により、勢いを得ることになりました。

第二次メガ（以下新メガと呼びます）は第一部、『資本論』をのぞくマルクスとエンゲルスの生前に出版された著作、第二部、『資本論』関係の著作と草稿、第三部、書簡（マルクスとエンゲルスの発信したものと、第三者から彼らに向けて発信されたもの）、第四部、抜粋ノート、メモ類、の4つ部分からなり、当初は150巻近くにもおよぶ壮大な企画

でした。しかし、現在はこれを大幅に縮小した計画によって刊行準備が進められています。

日本でも他の諸国でも60年代末から、すでに邦訳のあった『経済学批判要綱』が『資本論』を相対化するものとして盛んに取り上げられさまざまな視角から論じられました。また、70年代の後半に入ると上記の『要綱』以後の時期の資本論草稿をそれぞれ『資本論』との関連において位置づけ、同時に従来の『資本論』理解・解釈に対して新たな照明を当てようとする試み、いわゆる「形成史的研究」が特にこの日本のマルクス経済学の世界で大きくクローズアップされた一時期がありました。また、直接『資本論』とはかかわりませんが、『ドイツ・イデオロギー』のMEGAの試行版としての刊行や故廣松渉による独自編集版がこの時代に現れたのも、「原マルクスの復元」という点では『資本論』研究をめぐる動きと共通する同時代の動向とあってよいと思います。この時代にマルクス経済学研究の世界でマルクスの草稿などの原資料にもとづく『資本論』の形成史的研究に先鞭を付けたのが、すでに50年代に『要綱』に立脚してプラン問題に新しい展開を切り開いていた故佐藤金三郎でした。大学闘争の時代の60年代末にアムステルダムで、『資本論』の先にふれた原初稿を調査してその概要を日本の学界に紹介した氏の研究は、この時期には大きな反響をよび、『要綱』研究の隆盛ともあいまって70年代からの形成史研究を先導する役割を果たしました。80年代初のおなじアムステルダムでの草稿調査からはじまる大谷さんのご研究も、こうした流れのなかからでてきたものとしてよいと思います。

新メガの諸巻が70年代から少しずつ出始めたこともこうした動きを加速しました。日本では世界に先駆けてメガの第二部（資本論関係の草稿と刊行物）の既刊部分のうち61-63年草稿までの部分をなす全9冊が、メガをもとにして翻訳出版され新しい資本論研究のための資料的な基礎を形作りました。これは、50年代・60年代にこの分野の先駆的な仕事の中で故佐藤金三郎が折に触れては嘆いていた資料的不備（氏の遺著『『資本論』研究序説』、岩波書店、1992年、所収の諸論文を参照）とは大きく異なる研究環境を提供するものでした。しかし残念なことに、およそ70年代後半からの時代は、旧社会主義諸国のさまざまな問題の噴出と経済的停滞、資本主義諸国における新自由主義の台頭、マルクス主義・マルクス経済学の威信と影響力の低下といった、一般的な時代背景の中で、『資本論』の形成史的研究は限られた一部の専門家たちのあいだでの微細な問題をめぐる「超専門的な」議

論に躊躇してゆき、70年代初めの頃に期待されていた理論研究そのものの新しい展望を切り開くところまでなかなか行き着けないままになっているように思います。

そして80年代末から90年代初頭にかけてソ連・東欧の旧社会主義が崩壊し、これとともにメガ事業の続行も一時危機的な状況に瀕しました。詳しい経緯は省略しますが、こうした状況のなかから、まったく新しい方針に基づく、日本の研究者も含む国際的な協力による、新メガを継続する体制が構築され現在も活動を続けています。90年代に入って刊行されたメガのいくつかの巻には、旧体制のもとで編集されたもの、新旧両体制下で編集されたもの、新しい体制のもとで編集されたものがありますが、今後刊行予定の巻はすべて新体制下の編集によるものです。

日本からのメガ編集への協力・参加は、大谷さんを代表として、70-80年代からの資本論草稿研究を担った研究者を中心として行われており、現在、メガ第二部に収録される『資本論』第二部関係の3つの巻と第四部のマルクスとエンゲルスの60年代の読書ノート（抜粋帳）を含む3つの巻の、合計6巻の刊行に向けた作業がおおよそ過去5年来続けられてきました。このうち、『資本論』第二部のエンゲルス編集原稿をおさめた第二部第十二巻（大村泉さんを中心とする仙台のグループの担当）はすでに編集作業を基本的に完了し、最終チェックを経た上で早ければ2005年中にもドイツの科学アカデミーから出版されることになっています。また同じく『資本論』第二部のマルクスによる数次の草稿をおさめる第二部第十一巻（大谷さんがモスクワのヴァシーナさんとの共同で担当）も、第十二巻につづいて作業完了・刊行の見通しとなっています。その他の4つの巻の編集作業もゆっくりですが着実に進んでおり、数年後には日の目をみるよう努力が続けられています。言語的に大きなハンディを負う日本人の研究者の手によって、ネイティブに助けられてではあれ、マルクスの手書の草稿をもとにしたドイツ語の刊行物を厳密な編集作業を経て世界に向けて送り出すというようなことは、一昔前には夢想だにされなかったことです。世間からはもちろんのこと学界においてさえ忘れられがちな地道な息の長い作業ですが、ようやく具体的な形となった成果がまもなく現れる段階に到達しようとしていることを、ここに強調しておきたいと思います。

かつて故高須賀義博が批判したように、日本の資本論形成史研究が経済学研究における人的資源をある時期過大に吸収したことは事実であり、また、マルクスの原資料の研究が

それ以前の『資本論』の理論的研究に対してまだ何らかの大きな貢献をなすにいたっていないのも事実です。しかし、マルクスとエンゲルスを一体化して神聖不可侵とするような時代が終わり、『資本論』を含むマルクスやエンゲルスの遺産の自由な研究がこれから進められるそういう時代に向けて、基礎資料を整備する作業は大きな意義を有するものです。高須賀氏の批判も的外れではないと私は思いますが、今の日本でこのような作業の遂行が可能であるのは、先に述べたような前世紀70年代以降の日本のマルクス経済学界の一角の状況に負うところが非常に大きいと言わなければなりません。それと同時に、私自身のこともふくめていっておくべきことは、こうした文献的な研究の成果の上につづ本格的な理論研究はまだこれからの課題として残されており、この課題に取り組むことがなければせっかくの文献的な研究も意義をもちえないことになるであろう、ということです。

四. 『資本論』第三部第五章（篇）の草稿の研究

さて、だいぶ長い回り道をしてようやく本日の大谷さんのご報告のテーマそのものについてのコメントらしきものをする順番になりました。大谷さんの報告資料の最後に掲載されているように、大谷さんは80年代はじめからちょうど20年間にわたってアムステルダムでの調査をもとにした『資本論』第三部第五章を構成する各部分について（便宜上現行エンゲルス版の章構成にしたがって）、草稿についての検討と草稿そのものの翻訳とを内容とする論文と、この第五章全体の構成や読み方について総括的に論じた論文とを、『経済志林』（大谷さんのご所属の法政大学経済学部の紀要）、『信用理論研究』（信用理論研究会の機関誌）、『資本論体系 6. 利子・信用』（有斐閣）などに掲載されてきました。私は、最初の論文からほとんどすべて抜き刷りをいただいています。この間ずっとこれらの論文であつかわれている主題を私自身の研究テーマにしていたわけではありませんでしたので、送っていただくたびにざっと見させていただいてはお礼のはがきを出し、先で第三部第五章のことをまとめて調べる機会もあろうと送られてくるたびに大型の封筒にまとめていれてためておりましたら、いつのまにかものすごい量になっていました。大谷さんはもちろんこの間には他にもたくさんの仕事もなさっていますが、それにしても、20年間も同一テーマについて論文を書き続けるというのは、私などにはとてもまねのできない大変

息の長い研究活動の結果です。これまで発表になった一連の関連論文をひとつにまとめて、今後の研究者の便に供していただければ学界にとっても有益なことだと思います。それはともかく、本日は、これだけたくさんの貴重な研究成果を送っていただいたお礼のほんの一部として、ご報告のコメントをさせていただいているようなわけです。

本日はこの研究会の性格上、大谷さんのご論文から直接に文章を引っ張ってきてそれについてあれこれ述べるというやりかたはせず、大谷さんが第三部第五章の草稿研究からひきだされたと私に思える重要な論点を取り上げ、その意義について述べさせていただくということにします。話の取っかかりとしてふたたび時代をさかのぼってみることにします。

第二次大戦の末期から官憲の弾圧によって不可能になっていた『資本論』の研究が戦後息を吹き返し、マルクスの経済理論のいくつかの分野で活発な議論・論争が展開され戦後の研究の出発点を形作りました。その分野のひとつがマルクスの貨幣論・信用理論でした。私はもちろんこの時代の研究状況に直接立ち会った世代ではありませんので、何十年もあとになってから文献を通じて当時の状況を振り返ってみるしかないのですが、終戦直後の最初の10年あまりのいわゆる戦後復興期に貨幣論や信用論がマルクス経済学の世界でクローズアップされた分野のひとつであったのは、やはりこの時代の不安定な通貨情勢が背景としてあったように思います。マルクス経済学の貨幣論・信用論といえば『資本論』第一部のはじめの3つの章とならんで第三部の第五篇（草稿では章）が必ず取り上げられ、この第五篇はこの頃から研究対象として盛んに取り上げられたようです。現在ではあまり言及される機会もなくなりましたが、この時代のおそらく代表的なマルクス経済学の貨幣・信用理論研究者を動員して編まれた『講座 信用理論体系』（日本評論新社、1956年）の「基礎理論篇」に収録されている故三宅義夫の論考の中心問題のひとつが、この第五篇の第21章から第36章までの理論展開をどのように理解するか、とりわけ、最初の4つの章で述べられている利子生み資本についての理論と第25章から第35章までで論じられている（と受け取られた）信用制度についての議論（信用制度論）とが、どのような関連にあるのか、という問題でした。この当時は『資本論』第三部といえばエンゲルス編集の現行版しか考えられませんでした。もちろん、エンゲルスが付した編者としての序言からとりわけ第五篇が編集上の問題を多くはらんでいることは、当時の研究者にもわかっていたでしょうが、今日の大谷さんの報告にあったようにさらに深く広い問題が存在していることは、

故佐藤金三郎が第三部草稿を初めて紹介する（1971年雑誌『思想』誌上、同前掲著「第Ⅱ部 『資本論』第三部原稿について」に収録）までは、おそらくだれも考えても見なかったことであろうと思われます。

さて、利子生み資本というのは、第36章の記述からも分かるように、前資本主義的な高利貸し資本と対照される資本主義システム一般に汎通的な概念であり、抽象的一般的な扱いになじむものです。そして第21章から第24章までの理論展開はまさにこうした利子生み資本の性格にふさわしいものとなっていると思います。ところが、第25章以下のいわゆる「信用制度論」は、あとの部分になるほど完成度が低く未展開の部分が多いとともに岐論が複雑に入り組んでいて読解が容易ではないという点は別にしても、それまでの利子生み資本についての論述とは対照的に、19世紀中葉のイギリスの歴史的個別的な信用制度のありかた、もっと具体的にいえば、1944年のピール銀行法のもとにあったイングランド銀行の40年代末と50年代末の経済恐慌の際の行動とこれのもたらした恐慌深刻化の帰結についての議会内外での論争にかかわる資料の提示とこれについてのマルクスの若干のコメントや、株式会社や為替制度についてのとても体系的な論述の諸階梯とは思えないような記述からなっています。60年代中葉に書かれた草稿をもとに編集してこれを94年に刊行することになったわけですから、『資本論』という一般的な理論的な著書なのに刊行時点ですでに何十年も昔のことばかり書いてある、という印象を読者にあたえかねないと判断したのか、この部分にはエンゲルスが刊行時点から見て「最新の」情報を追加するという労をとっています。ともかく、このようにひとつの理論的な著書の前後部分としてつなげて読むのが難しい24章までと25章以下の関連をどのように捉えるか、というのが先に言及した三宅論文以来のマルクス信用理論の一大問題と受け取られ、多くの論者がこれにさまざまな形で取り組みました。もちろん、無理をしてまで関連づけようとすることはやめて、前後関係を付けられない、「利子生み資本論」と「信用制度論」とはうまくつながっていない、という形で問題を解消する行き方もありえたでしょうが、多くの『資本論』研究者がマルクス（およびエンゲルスの）絶対的権威を疑うことをタブーとする公式マルクス主義の強い影響下にあった時代には、こうした行き方を取る論者がたとえいたとしても、研究者の世界で本気で取り上げられることはまずなかったと思われます。

『資本論』第三部第五章が上のように3つの部分からなることを大前提とした上で、最

280

初のふたつの部分のあいだの関連を問うことが、現在に至るまでマルクス信用論の大きな理論的問題であり続けているからこそ、大谷さんが報告の最後でおっしゃった「私に対する異論」が今日の研究者のあいだからもでてくるわけです。私自身は終戦後以来の長い歴史を持つマルクス信用論研究の外に身を置いていましたから、「異論」を唱える研究者たちの論点に固執する理由はなにもなく、大谷さんが第三部原初稿のご研究からひきだされた第五章の新しい——というよりもむしろ当然の——読み方をそのまま受け入れてよいように思います。先程ご自身から話されたことですので繰り返しになりますが、ここがポイントだと考えますので再度言及させていただきます。報告資料の7ページに書かれている「第五章の構成の概観」²を見てください。全体が大きくAとBというふたつの部分に分け

² 以下に研究会当日配布された資料の当該箇所を再録しておく。

第5章の構成の概観

A. 利子生み資本の理論的展開

I. 利子生み資本の概念的把握

- (1) (草稿：「1」〔表題なし〕) (エンゲルス版：「第21章 利子生み資本」)
- (2) (草稿：「2」利潤の分割。利子率。利子の自然率) (エンゲルス版：「第22章 利潤の分割。利子率の「自然」率」)
- (3) (草稿：「4」〔表題なし，4は3の誤記〕) (エンゲルス版：「第23章 利子と企業者利得」)
- (4) (草稿：「5」利子生み資本の形態における剰余価値および資本関係一般の外面化〔5は4の誤記〕) (エンゲルス版：「第24章 利子生み資本の形態での資本関係の外面化」)

II. 信用制度下の利子生み資本の考察 (草稿：「5」信用。架空資本)

(1) 信用制度概説

- (a) 信用制度の二側面とその基本的な仕組み (エンゲルス版：「第24章信用と架空資本」の初めの約4分の1)
- (b) 資本主義的生産における信用制度の役割 (エンゲルス版：「第27章 資本主義的生産における信用の役割」)

(2) 信用制度下の利子生み資本 (monied capital) の分析

- (a) monied capitalをめぐる概念上の諸混乱 (草稿：「I」〔表題なし〕) (エンゲルス版：「第28章 流通手段と資本。トゥックとフラートンとの見解」)
- (b) monied capitalの諸形態。架空資本としてのmonied capital (草稿：「II」〔表題なし〕) (エンゲルス版：「第29章 銀行資本の構成部分」)
- (c) 実物資本との関連におけるmonied capitalの分析 (草稿：「III」〔表題なし〕) (エンゲルス版：「第30章 貨幣資本と現実資本I」, 「第31章 貨幣資本と現実資本II」, 「第32章 貨幣資本と現実資本III」)
- (3) 地金の流出入。信用システムの貨幣システムによる被制約性 (草稿：ノート「混乱」のあと，本文として書かれた部分) (エンゲルス版：「第35章 貴金属と為替相場」)

B. 利子生み資本にかんする歴史的考察 (草稿：「6」先ブルジョア的なもの) (エンゲルス版：「第36章 先資本主義的なもの」)

られており、そのいずれもが「利子生み資本」を扱うものとなっています。AとBの違いは、前者が圧倒的なウエイトを占めることを別とすれば、この利子生み資本の理論的な解明と同じ利子生み資本に対する歴史的な考察との相違です。ある理論的な対象について、それをまず出来上がった資本主義的生産様式の内部で機能しているままに取り上げて分析し、その後に当該対象の歴史的生成を考察するというのは、マルクスが『資本論』の各所でとっているいわば常套的な行き方であり（いわゆる「論理＝歴史的方法」ではない）、第五章でも同じ方法が用いられているというだけです。『資本論』をざっと眺めただけでも、貨幣論、資本蓄積論、商業利潤論、地代論などに同じ方法を確認することができます。

ともかくこうして、第五章は、異なったアプローチを含むとはいえ、全体が利子生み資本論として捉えられることとなります。第24章までの「利子生み資本論」に続く相対的に独立した理論領域つまり「信用制度論」として従来捉えられてきた第25章から第35章までも、Aの後半部分として捉えられます。前半部分との違いは、ここでは歴史的具体的な信用制度の下で利子生み資本がどのように運動するのかという、同じ分析対象に対するアプローチの相違にすぎないことになり、この部分では「利子生み資本」に代わって「信用制度」が理論的对象とされているのではないことが明らかにされました。このように捉えることができれば、第五章の全体がきわめてすっきりした構成をもっていることになり、長年マルクス信用理論の世界で論じられてきた問題そのものが、もともと存在しない問題だったということになります。私のみるところでは、大谷さんの第三部原初稿にかかわるお仕事が明らかにした諸点のなかで、これがもっとも大きな意義をもつ点だと思います。

第25章以下の部分には、マルクスが草稿を執筆していた時代のイギリスの具体的な通貨信用制度についての記述やこれらをめぐるさまざまな議論からの引証が含まれています。エンゲルスは第三部の編集にあたって、マルクス自身の草稿を常に参照するのではなく、アイゼンガルテンというドイツ人の助手に口述筆記させた原稿を基礎にして作業を行いました。こうした現行エンゲルス版の編集の仕方そのものから、マルクスが草稿の本文として書いた部分と、関連文献や統計資料それに議会証言などから集めた草稿執筆のための材料の部分とが、区別なく一緒くたにされて「きわめて完成度の低い未定稿」つまりエンゲルスの用いた口述筆記原稿ができあがり、これが現行版のベースとされることになりました。大谷さんは、ここから生じる混乱を払拭してマルクスが原稿として書いた部分のみを

忠実に再現していけば、先に見たような読み方が可能になるとされました。ただし、この草稿本体の部分にも全体をすっきりと割り切って読むのを困難にするような記述がいくつも含まれていることも事実です。資本主義的信用の取るひとつの形態としての株式会社のもつ将来社会への通過点としての意義の強調や、イングランド銀行の行動と恐慌のかかわりをめぐる執拗な具体的分析、また外国為替制度についての記述などは、「信用制度の下での利子生み資本」を論ずる箇所を取り上げるべき論題かどうか疑わしいように思われます。草稿を執筆しているときに「革命家マルクス」が、書いている部分の全体の文脈を離れて、つい夢中になって筆を延ばしてしまったのではないのでしょうか。そうだとすれば、こうした例を含むいくつかの岐論は、もしマルクスが第三部の草稿を第一部や第二部のように後で再検討する機会をもてていたならば、相当大幅な書き直しあるいは配置換えあるいは削除の対象となったのではないかと推測されます。著者の死後にこういう推測をしてみてもはじまりませんが、いずれにせよ、草稿に近い形で読めるようになったからといって、解読の障害や困難がなくなったわけではありません。

以上の点と関連して、大谷さんの仕事がもち得るもう一つの含意すなわちプラン問題とのかかわりに簡単にふれておきます。プラン問題というのはグロスマンという学者が両大戦間期に発表した論文の中で提起し、その後長いあいだ論争された問題です。決定的な決着は見ておりませんが、現在ではマルクス経済学の世界でもやや忘れ去られたような状態にあります。何度も言及した故佐藤金三郎はわが国におけるこのテーマにかかわる第一人者でした。先にふれた佐藤の遺著の多くの部分がこの問題の論及に当てられています。本日はこの問題について立ち入ったことはお話しできませんが、ごく簡単に言うと、マルクスが『資本論』を書くにあたって当初たてたプランが『資本論』全三部でどこまで実現されたのかという問題です。時間の関係でこのプラン（実は一通りではないのですが）の詳細をお示しすることはできませんが、このプランによるとマルクスの構想した体系は大きくは、資本・賃労働・土地所有・国家・外国貿易・世界市場という6つの部分からなるとされ、その第一部の最初の部分は、資本といってもひとつの国民経済のすべての資本をひとかたまりにして見たような「資本一般」というものを対象として、資本そのものの本質を明らかにする部分とされていました。この「資本一般」の中がトリアーデ形式で「資本の生産過程」・「資本の流通過程」・「両者の統一または資本と利潤、利子」という3

つの部分からなるとされてきました。大雑把に言えばこの3つの部分が現在われわれの手にする『資本論』の3つの巻に相当します。つまり、『資本論』という膨大なマルクスの主著は実は彼の構想した計画の最初のごく一部にしかすぎなかったのです。今日のテーマである第三部は「両者の統一または資本と利潤、利子」と題されています。61-63年草稿の一部にこの第三部にかかわると考えられる草稿が含まれていて、その部分はこの題と同様の「資本と利潤」という標題が付されています。ところが現行の第三部は七つの篇からなり、剰余価値と利潤をあつかった最初の3つの篇につづいて商業利潤・利子・地代を扱う3つの篇、そしてこれらの収入諸形態の源泉とその神秘化を解明する最後の第七篇が置かれています。このような違いは、もともとマルクスによって剰余価値が利潤の形をとることとそのことがもたらす諸事態の解明を中心に考えられていた第三部が、利潤に続いて利潤の三つの分岐形態についての論究も利潤との関連において含むものに拡充された、しかし、第三部の中心テーマはあくまでも利潤であるということを示しています。第五篇(草稿では、章)の利子生み資本の生む利子もこのような文脈で捉えられるべきだと思います。これに対して、信用ないし信用制度の扱いは、先に簡単にふれたプランでは、同じく最初の「資本」の部分の中の「資本一般」に後続する諸項目のひとつに配されています。つまり、利子と信用とは資本主義経済の実際の中では相互に密接に関連しているとはいえ、もともとマルクスの構想の中では両者は別個に扱われるとされていたのですが、大谷さんのお仕事はこのことを第三部の原稿に則して示しました。また、詳細は省略しますがプラン論争における「両極分解説」のように、当初はプランの後のほうに配されていたテーマがマルクスの作業の進展に伴ってはじめのほうの項目に一部取り入れられることになったとする解釈に対しても、こと「信用」にかかわる限りでは批判的含意をもち得るでしょう。

五. 質問ないし要望

以上の私の話の中にも実質的にはいくつかの質問が含まれていますが、最後に若干の質問ないし要望を明示的に述べることでおしまいにしたいと思います。

70年代から本格化した『資本論』の草稿研究は、ちょうど同じ時代にはじまった新メガの刊行開始に刺激されこれの影響を受けて進められたという面をもつと同時に、この新メ

が事業の進展との一種の競合関係にもあります。草稿研究のある部分の成果は、メガの当該巻が刊行されると、その存在意義をなくすかまたは少なくとも大いに低下させることになりました。これは私の恩師の佐藤金三郎先生がよく口にしておられたことでした。1993年に、大谷さんの第三部第五章の草稿研究の対象を含む資本論第三部主要原稿を収めたメガ第二部第四巻が刊行されました。大谷さんはこのときで自分の仕事をやめようかとも思ったと仰っていますが、ご研究にはメガには当然含まれていない邦訳テキストと草稿についての詳細な検討があり、メガの刊行によって存在意義を失ってしまうことはないでしょう。その上で、大谷さんの目からみて、旧編集体制のもとで基本的な作業が行われ刊行されたメガ版原初稿のメリットと問題点はどのようなもののでしょうか。特に後者のもっとも重要な点は何でしょうか。

これと関連してエンゲルス版が刊行以来一世紀にわたって果たしてきた役割についての評価とは別個に、この版が今後もち得る役割についてどのように考えたらよいのでしょうか。単にエンゲルスがある特定の歴史的状況の中で作ったほとんど彼のものといってよい著作として位置づけられるのでしょうか。その場合には、エンゲルス版はきわめて高度な専門研究の資料としてだけ意味を持つことになりそうです。こういう質問をするのは、メガが出たからといって、ごく一部の専門研究者を除いて、『資本論』第三部を読み研究しようとするとき、現状ではエンゲルス版による以外にはないのではないかと思うからです。こうした状況を変えようとするれば、新メガ版を日本語に訳出刊行するしかないでしょう。すでに10年も前から大谷さんはこの翻訳を予告されていますが、現在の進行状況はいかなもののでしょうか。しかし、ここにもまたハードルがあります。すでにメガ編集に基づいた『剰余価値学説史』や『経済学批判要綱』の日本語訳は存在しますが、これらは日本語で読めるとはいえとても一般読者向けとは言えません。そうすると、あり得るのは、メガの編集成果や独自の草稿研究の成果を取り入れて新たな一般向けの版本を編集し直しその日本語訳を提供する³ということになりそうですが、このような仕事には幾多のハードルが予想され実現はなかなか難しいのではないかと思います。

³ 2002年に岩波文庫版として刊行された廣松渉編訳・小林昌人補訳の『ドイツ・イデオロギー』はこれに近いコンセプトによるともいえよう。ただし廣松によるドイツ・イデオロギーの編集は、新メガとは別の独自の研究によるもので必ずしも本稿の文脈には収まらない次元をもつ。

ついでですので、最後にもうすこし話を広げてみます。2004年の9月末から4日間パリで開催された第四回国際マルクス会議のメガ関係のセッションで、日本でも多少名前の知られているルシアン・セーブ氏が現在フランスで進められているマルクス・エンゲルスの大規模な著作集の刊行プロジェクト（GEME）について報告しました。ただしその実現の時期については言明を避けたので、どのくらい具体性のあるプロジェクトなのかは明らかではありませんが。その概要は、現在までに刊行されているメガの成果を生かせる部分は生かして使ったフランス語の翻訳版を電子媒体を優先させて出版するというものようです。フランスには第二次大戦前からコスト社やエディシオン・ソシアル社の多数のマルクス・エンゲルス著作の刊行実績があり、彼らの著作の普及に貢献してきました。今回のプロジェクトもこうした伝統を受け継ぐべく、一部専門研究者のみを対象とした刊行物としてではなく一般読者にも受け入れられるような形にメガ版を改変したものをシリーズで出すことを考えているようです。ただ、この構想がどのくらいの具体性をもって計画化されているのか、最初の成果が出るのがいつ頃と見込まれるのか、といった質問には明確な答えがなかったため、アイディアの域をあまり出ていないようなものなのかもしれません。しかし、同じようなことは日本においても将来考えるべきときがくる可能性は十分にあり得ると思います。先程は『資本論』第三部のメガ版をもとにした翻訳刊行物の可能性について質問しましたが、他の諸著作についても同様な問題が生じる可能性があり、大谷さんに何かお考えがありましたらお聞かせねがいたいと思います。